

がん医療の領域では遺伝／ゲノム学の知識が必要不可欠になってきており、国を挙げて「ゲノム医療人」の育成に取り組んでいます。

日本がん看護学会では「遺伝がん看護」特別関心活動グループにおいて、遺伝／ゲノム学を看護に取り入れ、がん患者や遺伝性腫瘍の患者への看護の質を高めるために学会の支援のもと、研究、教育、実践を行ってきました。これからも活動グループを中心に、国民の皆さまが安心してがん治療を受けられるよう、遺伝がん看護をより一層洗練し、拡充していくための活動に精進する所存です。

そのためにはまず国民の皆さまや遺伝／ゲノム医療にかかわる多くの医療従事者に、遺伝／ゲノム医療の領域における看護職の役割を広く知っていただく必要があります。国民ならびに医療従事者の皆さまには本見解の趣旨をご理解いただき、今後も皆さまのご期待に沿えるよう尽力してまいります。

日本がん看護学会

特別関心活動グループ 遺伝がん看護

遺伝／ゲノム医療の発展に伴う看護職の役割

遺伝／ゲノム医療への関心が高まりつつあり、その支援体制の必要性が指摘され、人材育成が急務とされているが、がん看護に携わる看護職はこれまでも様々な役割を担ってきている。一般社団法人がん看護学会の「遺伝がん看護」特別関心活動グループでは、がん遺伝／ゲノム医療の発展に寄与し、国民により質の高い看護・医療を提供するために、現状における看護の活動と今後の課題を提示する。

■遺伝／ゲノム医療の発展

遺伝／ゲノム医療の中でも特にがん領域は、診断、治療のあらゆる面において飛躍的発展の渦中にある。かつて病理診断は細胞や組織の免疫染色で診断がなされていたが、現在では遺伝子構造の微細な変化を捉えた、より精度の高い診断方法が開発され臨床応用されている。また遺伝子の機能や発現を応用した創薬も進んでおり、抗がん作用のある多数の分子標的薬が臨床で使用され、多くの命を救っている。

がん領域では遺伝／ゲノム医療がさらに一般化し、がんの診断や治療の場面で遺伝／ゲノム医療が応用されると思われる。特に治療領域では遺伝子の構造や機能を応用した創薬が進むことが予測される。患者は医師から提案されている治療と自分の遺伝情報がどのように関係するのかを理解しながら治療をうける時代になるであろう。また自分の治療のために調べる遺伝情報が、家族に影響することを理解し、その上で治療や検査を選択しなければなくなる時代も間近である。

■遺伝／ゲノム医療におけるがん看護の現状

がん看護に従事する看護職は、遺伝／ゲノム医療の臨床への普及に伴い、それを学び看護に反映してきた。例えば現在のはがんの診断に多くの遺伝／ゲノム医療技術が応用されている。看護職はそれらの知識を身につけ、患者に分かりやすく説明できるようコミュニケーション技術を磨いたり、資料を作製したりして、検査結果に記述されている意味を患者や家族が理解しやすいよう工夫を重ねている。また創薬においても遺伝／ゲノム医療技術は広く応用されており、多くの分子標的薬が開発され負担の少ないがん治療が実現されている。看護職は従来からある殺細胞薬とゲノム医療を応用した分子標的薬の薬理作用の違いを理解し、それに伴って治療中の生活にどのような影響が出る可能性があるのかを伝え、患者とともに良い日常生活の整え方を考えている。

こうした役割はがん患者への「診療の補助」「療養上の世話」という従来の看護の業だが、遺伝／ゲノム医療ががん治療に適用されるようになった現在でも、看護職はそれらの知識を習得し日々の看護に役立て、がん治療を受ける患者の負担が少しでも和らぐよう活動している。

■がん遺伝カウンセリング体制の構築

近年は遺伝的にがん罹患しやすい家族性腫瘍・遺伝性腫瘍に対する遺伝医療の必要性に対する認識が高まり、全国で質の高い遺伝医療が提供できるよう十分な体制を整えることが望まれている。

これまで遺伝カウンセリング体制のなかった医療施設では、認定や専門看護師だけではなく、外来や病棟で日々の看護を実践している看護師が目目の患者や家族をサポートするために奔走してきた。各看護職の担っている役割はそれぞれ異なるが、看護職は施設内の多職種連携を活かして、予約体制や外来診療枠の確保といった事務的な体制作りから、問診票や説明資料の作成といったチームをマネジメントする役割まで担っている。また実際の診療の場面では、一般外来で家族歴を聴取する役割を担ったり、それを一般の看護師に教育したりする役割も担っている。こうした看護職の働きは遺伝カウンセリング体制の構築から診療において必要不可欠であり、看護職を対象とした遺伝／ゲノム医療に関する学習ニーズは年々高まっている。現在では各種学会でも看護職を対象にした遺伝／ゲノム医療に関するセミナーが増えている。

■遺伝／ゲノム医療を支えるチーム医療におけるがん看護職に期待される役割と機能

がんと遺伝が複雑に絡まった課題を、患者が、がんを治療しながら検討し、選択していくことは精神的にも身体的にも負担になり得る。看護職は患者がより良い医療を選択できるよう、医師、認定遺伝カウンセラー、薬剤師などのメディカルスタッフとチームを形成し、チームの一人として患者を支えていく必要がある。また、遺伝という課題は医療だけでは解決し得ないことが多い。そのため必要に応じて臨床心理士、理学療法士、ケースワーカー、事務部門などあらゆる医療スタッフに理解と協力を求めなければならない場面もある。また、当事者団体との協働も必要である。看護職は患者の全体像を俯瞰し、時に応じて必要なチームを形成しマネジメントする機能も求められる。

2017年6月吉日

一般社団法人 日本がん看護学会

特別関心活動グループ 遺伝がん看護